山口芸術短期大学研究紀要 第56号 2024年 pp.43～57

絵本から広がる幼児造形表現活動

弘中順一

Formative Expression Activities for Young Children Expanded by Picture Books

HIRONAKA Junichi

１．はじめに

(1) 絵本の教材性

年長児が２歳の弟に読み聞かせをしている。絵本は『だるまさんが』(かがくいひろし作・絵)である。絵本の最初の見開きで「だるまさんが」左右に踊っている場面、読み聞かせをしながら絵本を左右に振りながら「だるまさんが」と声を出す。すると弟も身体を動かしながら「だるまさんが」と声を出し、にこりと笑った。次のページの見開きでは、「どて」とだるまさんが倒れている。この場面でまず笑みが浮かんだ。読み聞かせをするうちに、「どて」と身体が倒れた。このように、絵本の中に入り込み、感じたことを言葉で言ったり、身体で表現したりしている。この絵本「だるまさんが」は、乳児から幼児さらに大人まで愛され、読み聞かせをしてもらったり、自分で読んだりして画面の変化と音の面白さを感じ、オノマトペと身体を動かす面白さを味わうことができる。

絵本は、読んだり読み聞かせてしてもらったりする中で、自分の身の回りについて振り返ったり、いつもとは違う世界に入り込んだりすることができるものである。「言葉（言語と音楽性）と絵（造形性）とが一体となった総合的な表現媒体であることが、子供が『日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する』のに最も適した教材の一つになります。言語が伝える意味内容ばかりでなく、意味を具体的に支える音（言語を含む）や形や色が相互に関わり合いながら、感覚に直接働きかけて子どもの心を動かします。」[1] とあるように子どもは、絵本の絵と音（言語を含む）からの見取り、心を動かしているといえるのではないか。絵本は、言葉や歌、絵、身体などを用いて表現するのに適した教材となりうるので、絵本から広がる表現遊びに着目し、特に造形表現へのつながりを探ってみたい。

(2) 物語絵本と認識絵本

詩人、谷川俊太郎の絵本つくりは、24歳の時（1956年）写真と詩の関係に興味を抱いてつくった写真詩集『絵本』からである。谷川がつくりたいと志向するようになった絵本は、レオ・レオニの『あおくんときいろちゃん』(訳・藤田圭雄、至光社、1967年）で「これは単純なテキストをもつ一種の物語絵本だが、青と黄の色が仲良くなって緑になるという発想に、お話にさし絵をつけるものでもなく、絵に説明をつけるものでもない、絵本というひとつの独立したジャンルの可能性を感じた。こういうものなら、自分にもできそうだし、やってみたいと私は思った」[2] とコメントしている。谷川と画家が共同作業でつくった絵本が多数あるが、絵本『まるのおうさま』

（文：谷川俊太郎、絵：粟津潔、福音館書店、1971 年）の本の解説として谷川は、「絵を描く人間と文章を書く人間との共同作業で絵本をつくりたいという発想が強かった。物語があって、その説明に絵がついている風じゃなくて、文書の内蔵しているイメージがそれとは次元の違うところで絵として出てくるというようなものにしたい、そんな気持ちが強かったですね」[3] と述べる。谷川は、絵本づくりにおいてこれまで主流であった「物語絵本」に相対するものとして「世界を整理整頓して、ある切り口で世界を見せる」といった絵本をつくろうと考えたのが「認識絵本」というスタイルだった。「認識絵本」という絵本づくりの方向性から、認識絵本は、絵本の中の言葉と絵から作者の「思い」を感じ、感じたことを表現にする可能性に富んでいる。

認識絵本に出合わせることで、絵本の文と絵から、想像を働かせ、何かに見立てることが可能となり造形表現活動に結び付けることができるのではないか。

２．造形表現活動での「みたて」

(1) 創造的な想像力を育む

幼児教育において、表現活動が重視されるのは、幼児期に子どもの想像力が最も発達するという適時性にある。絵を描くことやものをつくるときに「なにか」を別の「なにか」見立てるという想像力が働く。想像力を育てるには、造形表現活動で「見立てる」場面をつくり出すことである。何かの色や形からイメージを広げ、何かを思いついたり、これまでの自分の経験と結び付けて思いを広げたりすることで想像力が働く。「見立て」を働かせ場面をつくるとするとき、絵本の中にその場面が多く隠されているのではないか。

(2) 子どもの遊びと造形表現活動

幼児教育は、環境を整えることで遊びを通した子どもの主体的な活動を通して行われる。造形表現活動は、「ヒト・モノ・場」に深く関わるので「環境」を「ヒト・モノ・場」と置き換えると、子どもの遊びを促すような造形表現活動が可能である。保育者は、子どもが見立てをすることができるように「ヒト・モノ・場」を意図的に加工することができるならば、子どもは想像力を発揮し、表現活動ができると考える。また、保育における今日的課題として「協同的な学び」があげられるが、造形表現活動、特に造形あそびでは、協同的な学びが自然の姿で見ることができる。ヒト（保育者・友達）・モノと「対話」が協同的な学びの重要な鍵になるが、モノ（教材）と出会わせ、時間を保障し、場や状況をつくることで、子どもたちは、モノとしっかり「対話」し、その中ですることを促すことができたらと考える。対話を通し対象と関わり合うことで自分の思いを持って表現する活動へ取り組めるのではないか。そして、表現する中で、思いのよさや表現の工夫について保育者や友達との「対話」がはじまりまる。造形表現活動においてこのような道筋を歩ませることができるように要件を考えたい。

(3) 絵本から見立てを促す

「赤ちゃんから絵本」シリーズ（クレヨンハウス）の刊行に際して谷川は、「絵本のことばというのは『文字』になっていますが、赤ちゃんの絵本の場合は、本当は、文字ではなく声や音であるべきと思うのです。赤ちゃんは、まだ文字を持っていないわけですから。そしてその『声』に合うのは、日常使っている意味伝達のことばではなくて、おかあさんが赤ちゃんをあやすような、意味を超えた愛情の形としてのことばがいいとぼくは思っています。」[4] と述べる。絵本『もこもこもこ』（元永定正・絵、谷川俊太郎・文）について谷川は、「言葉に関しては、無理に子ども向けに考えているわけじゃないんですよ。自分の中の子どもを解放してノンセンスな言葉を考えるのは、そんなに大変じゃないんです。大人はどうしても言葉の意味にとらわれるけれど、子ど

もは大人と違ってオノマトペ的なものに敏感に反応できるじゃないかということですよね。文字だけじゃ感じられないものを、声に出すととても面白くなる。（中略）この絵本は楽譜に近くて言葉と絵で演奏しているって感じがあります。」[5] と述べている。ここで取り上げる絵本をみると、意味のある言葉、意味をなさない言葉がある。絵本『もこ　もこもこ』について谷川は、絵を見て子どもがどう感じるか「もこ　もこもこ」という言葉を付けたが「もこもこ」でなく子どもが感じた別のことばでもいい。」と語っている。

保育の流れを組み立てる時、読み聞かせをした後に子どもの想いを引き出すためにどのような関わり方をすればよいか。一つは、「絵」をもとに話し合い。もう一つは、「言葉」をどう感じるのかということである。そこで、導入においてこの二つについて取り上げる「感じ取りの場」を設けることが大切ではないかと考える。

絵本の読み聞かせ後に、見立てをうながすように、絵本をもとに、次のような要件をもつ「感じとりの場」をもうけたい。

〇絵本の絵について
・絵を構成する線や面、形からみとる
・色からのイメージと色の変化からの感じとり
・形の読み取りとストーリーのつながり
〇言葉、音、声、音楽について
・オノマトペの音のイメージから
・言葉の意味の読み取りと言葉の響き
・意味の無い言葉の感じ取りとリズム
・声に出したときの響きと感じとり

このような「見立て」が可能な要件をもとに、絵本の中にその要素を見出し、子どもに出合わせることができるならば、選択・判断する場をつくることができ、本の中に遊びを見つけ、遊びを発展することができるであろう。

３．研究仮説と研究視点

絵本という芸術に出会わせることで子どもの感性を磨くことができると考える。絵本から感じたことを造形表現したり、音楽表現、身体表現、言語表現したりする環境をつくっていきたい。次のような仮説をもとに研究を進めた。

(1) 研究仮説

『絵本からのイメージを表現につなぐことができるように、絵本の読み聞かせの後の感じとりを絵や言葉に視点を当てて振り返り、身体で表したり、言葉で表したりするような過程をつくることができるならば、子どもたちは試行錯誤しながら創造的な想像力を発揮し、自分の思いを造形表現することができ、遊びへの発展性を持たせることができるはずである。』

(2) 研究視点

１）絵本との出会いにおいて子どもの読み取り・感じとりを優先する場をつくる。

・絵本の中の言葉と絵から作者の「思い」を感じ、感じたことを表現にするにあたって、子どもの感じとりを大事にしたい。保育者は、絵本の読み取りと感じ取りを教材研究するが、保育者の思いを前面に出さず、読み聞かせに専念する。
・子どもが絵本からの受け取ったことを表現しやすくする方法として、声に出す、音楽、身体表現、造形表現活動などを提案し、子どもの「選択・判断」にまかせる。

2）子どもが立ち止まって振り返り、自分の思いを納得のいくまで表現を追求するような過程を歩ませる。

・保育者が指示して活動を行うのでは、子どもの想像性が働く場面が少なく、試行場面も捨象される。そこで、子どもが「選択・判断」する場をつくり、保育の流れを組織する。

・そこに至るまで保育者はどのような環境を用意できればよいか、関わり方をどうすればよいのか。

3）表現をした後の振り返りの場「見てみてタイム」を保育の流れに設ける。

・同じ目的の遊びを楽しむ場合、自然に関わり合いが生まれる。友達がどんな遊びを考えたのかをお互いに知ることが、協同的な学びにつながる。また、友達の表現の良さを知り、その遊びを追体験することは子どもにとっての学びにつながる。その振り返りでの保育者の関わりは、双方向でのコミュニケーションを可能にする役割を持つ。

4．保育の実際と考察

(1) 実践事例１　絵本『かっきくけっこ』(谷川俊太郎・さく　堀内誠一・え　くもん出版、2009 年)

1）絵本の解釈と教材化について

谷川のこの本の制作意図は、「『かっきくけっこ』は、まず 50 音に親しみを持たせること。我々はなんとなく受け取っていますが、言葉の要素をまとめたもので、あれほど面白いものは世界中にもないと思います。文字も発音も美しい。この本では、表面的にはノンセンスでも、いろいろ声に出すことによって、言葉の響きや音の多様性を自然に身につけ、自己表現の豊かさやコミュニケーションの大切さを知ってほしいと思ったのです。」[6] とある。また「『あいうえお』を声に出したらどんな響きがするでしょう。柔らかい感じ、かたい感じ、すべすべしている？ざらざらしている？それを絵にしてみると、どんな色や形になるでしょう。明るい色、暗い色、形は丸い？角ばっている？『かきくけこ』や『さしすせそ』はどうでしょうか。行の持つ音の特徴や印象、音の出所（口の開け方、唇や舌）や印象の違いを感じながら絵本の読みを楽しむ』[7] とある。

絵本の絵を見ると、表紙は「へのへのもへじ」である。文字を使って絵にする方向性がわかる。最初のページは「あいうーえーお」の文に赤みの同心円が「あ」と同心円５つが絵になっている。「かっきく　けっこ」の文に方眼を下地にした角張ったかきくけこがデザインされている。「ささししすせせそ」の文に「さしすせそ」の文字を重ねて草のように描いた絵が、「文字を絵にしたら」という色々な描き方が示されている。

2）題材「絵本『かっきくっけこ』の遊びから」　　下関市泉幼稚園年長児

①ねらい

ア．50 音を声に出すことから感じたことをもとに色や形で表すことを楽しむ。

イ．水彩絵の具を使ってできる偶然の形や色から見立てをすることを楽しむ。

②準備

・共同絵の具（赤、青、黄、緑、白）、4 つ切り画用紙、マーカー、パス、コンテ等

③保育の実際

ア．導入の工夫

最初に、絵本『かっきくけっこ』をスライドで大きく映し読み聞かせをした。次に、もう一度読み聞かせをしながら、子どもたちに「あいうーえーお」等の文を声をだして言わせながら、絵について話し合いながら進めた。「あいうーえーお」の文には、５色の同心円の絵が付けてある。「かっきく　けっこ」の文には長方形を主体とて「かきくけこ」がデザインしてある画面になる。「ささししすせせそ」の文にひらかなをデザイン化し、風に揺れる草をイメージした絵が付けてあ

る。「だぢづでど」は、廊下を駆けて床の音がするイメージで大きな足が描かれていることを絵を示しながら話し合った。

イ．活動の展開

子どもたちは、少し考えてから表現する材料を選び画用紙に描き始めた。水彩絵の具やスタンピング材料、マーカー、コンテなど、子どもがこれまで経験したことがある材料を用意しているので材料を選びながら表現を始めた。

表現を見ると、「ざーじずぜ」図２とあるように、声に出して読み方を意識し文字の大きさを変えながら描いている。平かなに関心を持つ年長児ならで、鏡文字になっている子も少なくない。（図１）図３にあるように、平かなを書き、その文字の形に何か描き加えようとしている。「ら」を緑で描き、赤色で丸く囲んでいる。この表現の仕方は、絵本の絵の表現からの子どもの見とりといえる。50 音をきちんと書くわけでなく大きさや形を変えながら描き、それに綿棒で点を描き加えたり、空き容器で版を押したり、色を塗りつぶしたりしている。（図３）

図１

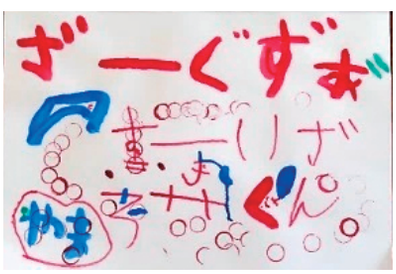
図２

図３

図４

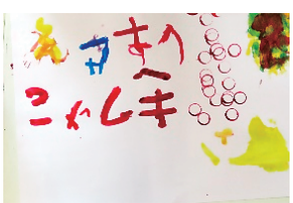
図５

図６

図７

文についても、子どもが考えた文字の並びになっており 50 音の言葉の響きを楽しみながら表現している。（図４、５）文には、50 音の並びから外れて表現し、手形を押した絵遊びになったり絵の具を加えながら色をかえ、文字の組み合わせを工夫したりして描き、思ったことを端的に表している。（図６，７）

ウ．表現を振り返る「見てみてタイム」

同じテーマで表現していったので、自分や友達のよさを振り返る場を設けた。つけた文を声を出して言いながら絵を紹介した。自分の描いた絵をもとに、50 音の言い方を考えた文にしているので、声に出しての抑揚や響きをふまえた表現に迫力を感じた。また、保育者は、子どもに自分の工夫したことや自慢したいことを言わせながら、保育者は絵を読み取りながら形や色の奇麗さを身体表現とともに紹介した。（図８）

図８

④保育の振り返りと考察

50 音の文字をデザインしている堀内誠一の絵は、抽象から具象に近い絵まで幅が広い。読み聞かせと共にこの絵に出会った子どもは、何を感じとっているか。保育中、子どもの表現過程を見ているが、表現が進まない子についての関わりが主になる。表現した後に子どもの絵を振り返って絵を読んでいくと子どもの思いがわかってくるが、子どもから直接言葉で聞いてもわからないだろう。絵としての表現が先で言葉はその後になることが理解できる。

表現の振り返りで「見てみてタイム」の場を設けているが、今回は主任が子どもの表現した絵を元に 50 音を言いながら身体表現をする場を設けた。広いホールで自分がつくった 50 音を声に出して言うことは、子どもにとって勇気がいることであるが、この園では年少児からこういった場を設けているので、子どもは躊躇なく表現することができている。絵本からの読み取りを絵で表現したり、身体や声で表現したりと、日頃慣れ親しんでいる 50 音であるが、幅の広い表現が可能である。絵に表現する過程では、この堀内の絵の存在が大きい。

(2) 実践事例２　絵本『んぐまーま』(大竹伸朗・絵　谷川俊太郎・文　クレヨンハウス 2003 年)

１）絵本の解釈と教材化について

絵本『んぐまーま』は、大竹伸朗が絵を最初に描き、谷川俊太郎が文を付けたものである。最初のページは、見開き右下に黄緑の草のようなものが、左半分に、朱色の塊から右に向かって線のようなものが広がってきている。この絵に谷川は､「うやむやむ　なむばなならむ」という意味不明の難解な文をつけている。次のページは、画面１／３に黄緑の草原が、朱色の線が、何か生き物のようなものに変わってきた。「ばーれ　だーれ　あまはんどら！」の文がつく。3 ページでは、草原の場面で「ほしくのしく　りしくみしく　てしくにゅく」と「しく」の入れた繰り返し文を入れ、途中の水中の場面で谷川は､「んぽか　んぽき　んぽく　んぽけ　んぽこ」と語尾を見ると「かきくけこ」が踏まえてある。絵を読み解くと朱い生き物が家に辿り着き、もう一人の生き物に出合う流れになっている。

教材化に当たって、絵を読み解くことと、それに付けられた谷川の文をどう子どもに出合わせるかが課題となる。特にこれまでの谷川の作品では、「意味のある言葉」｢意味のないが韻を踏む言葉」がある。絵本の題名「んぐまーま」を例にとると「ん」で始まるインド語の語感の良さが感じられるが「意味」を持たないのではないかと思われる。「まーま」は「ママ」すなわち「お母さん」と読み取りたい。

子どもと出会わせるとき、教師の解釈を押し付けるのでなく、子ども自身の感じ取りを最優先したいと考える。絵を読むことと、言葉の韻を踏みながら読み聞かせることが大切なのではないかと考える。

２）題材「わたしのんぐまーま」～絵本『んぐまーま』から～　　下関市泉幼稚園年長児

①ねらい

・絵本『んぐまーま』の絵を読んだり、言葉から感じたことをもとに、自分のお話を絵に表して楽しむ。

・水彩絵の具やカラーマーカーを使って描くことを楽しむ。

②準備

・四つ切画用紙、共同絵の具（赤、黄、青、緑、白）、カラーマーカー等

③保育の実際

ア．絵本の良さを知らせる導入の工夫

絵本の読み聞かせをしたあと、「んぐまーま」とは何か問いかけた。子どもからのすぐの反応はなかった。「言葉の意味が分からないかもしれませんが」と前置きし、もう一度一ページずつ絵を見せながら文を読んでいった。絵について何が描いてあるかの解釈は、子どもから出てくるものを尊重し、解釈を押し付けないようにした。読み終えた後、今度は、絵を映しながら、文について声を出して読ませた。子どもたちは、口に出すことで意味は不明だが、音の面白さをつかんだようだ。そこで、「どんなお話にしたら面白いだろう」「感じたことを描いて見よう」と促した。

イ．絵本の面白さから思いを広げて

共同絵の具を使ったので、自然と友達の表現を見ることのできる環境である。描き始めの早かったＡ児の横で、Ｂ児はなかなか思い浮かばず筆をと取る事ができないようだった。５分くらいたって筆が動いてきたが、筆が動いている子どもがまだ少ないようだったので、担任の保育者が絵本をもう一度読み聞かせを始めた２回くらい繰り返し行ってきた。言葉は、意味不明な部分が多いが、語感、韻の面白さから子どもは興味を持って聞いているようだ。「赤い生き物が家の中に入り誰かと出会った」との解釈か、赤い生き物を描きはじめ、そこから思いを広げている。描きはじめが最後になったＣ児は、画面中央に絵の具の主で朱の線を描き、生き物を表現した。そこから左下に自分を描き加えた。絵を見ると、お話の筋を自分なりに捉えており、自分との関わりから思いを広げていた。途中、表現が進まない子がいるので、担任が絵本の読み聞かせを再度行った。ここでの反応は、絵からストーリーを捉えようとしていて、文の音の感じ方の面白さに気付くようになってきた。

④保育の振り返りと考察

子どもたちが描いてくれた絵は、絵本のどのページから思いついたものなのかを比べてみた。１場面から２場面にかけて朱い生き物が姿を現し、「ばーれ　だーれ　あまはんどら！」の文がつけてあるが「おまえは誰だ」という解釈をしてみたい。

４場面目は、「いろにけ　へぶとむ…」という文に朱い生き物のムカデのような足が画面の半分の基底線から上に描いてあるのが印象的である。この場面に近い子どもの絵が図９・10である。

図９

図 10

図 11

5場面は「みょぷらぬ　のに？」の文であるが、「みょぷらぬ」をどう解釈するか。6場面の文が「んぐ・・」で左端に湖が出てきて、大きく赤い生き物が描かれている。「んぐ・・」は本のタイトルであり意味はわからないが意味あるものとして考えたい。この子は、中央に噴水の絵と右に赤い生き物。噴水を描いているこの図11は、最後の場面に出てくる家や他の生き物も描き加えている。

図12は、一番最初に表現を始めた子の作品である。保育中は青の表現が何を表しているのかわからなかったが、絵本の場面と照らし合わせながら読み取っていくとこの場面は7場面の湖の中のイメージではないかと思われる。

8場面は、画面中央に川が流れ、中央に大きな木と思えるものが描いてある。文は、「だばがじで　ごどぶげじょぴゃぎょの　ぜどげごび」で音の面白さはあるが意味をどうつけるか不明である。図13を見ると、赤い生き物が水に浮かんでいて、その上に色々な生き物。木も描いてあるので、この場面からイメージではないかと思われる。図14を見ると、最後の場面の家が画面の下に描かれてあるが、青い生き物の背中に蟹が描けていることからやはりこの場面からイメージを広げているのではないかと考える。

図12

図13

図14

10場面で家、11場面は、家の中が出てきて赤い生き物が黄色の生き物に出会う場面。文は「まーま　れーあ　ぎぇーな　ぽーい」とここでタイトルの「まーま」が出てくる。長い旅の後に「まーま」に出会えたのか11場面の文「すちぽた　ぬぴ　ふふ」。12場面の文は「んぐまーま」。

絵本の最後になると、朱い生き物が黄色い生き物に出会う。そういったことを踏まえながら家を描き、虹をいれて表現しているのが図15である。図16、17を見ると自分でつくった生き物や家などを付け加えている。図18は、自分の生活経験を踏まえた世界を表現している。

図15

図16

図17

図18

この絵本の第一印象は、ドローイングインクで描かれたきれいな色である。しかし、この絵に付けてある意味がわからない文をどう扱えばよいのかという不安もあった。絵本「もこもこもこ」の実践では、「もこもこもこ」に「もっこ」と出る意味と動きを感じとることができ、身体表現をした後に造形表現へと結びつけた。ここでは、読み聞かせのあと、絵について場面ごとに読み取りを話し合ったが、意味がない文を子どもがどのように受け取るかわからなくて、導入時には触

れなかった。外国語を聞いている感じになるのか、音から感じることを子どもなりに受け取らせた。後からではあるが、子どもの表現したものを場面に描いてあるものと対応して並べてみると子どもが何を描こうとしたのか改めて読み取ることができた。子どもが絵本を短時間に読み取り感じとって表現に結びつけていることに素晴らしさを感じた。

(3) 実践事例３　絵本『まるのおうさま』(粟津潔・絵　谷川俊太郎・文、福音館書店 2010 年、復刻版)

１）絵本の解釈と教材化について

絵本『まるのおうさま』は、谷川の初期の絵本である。お皿から始まって「我こそは丸い」「丸のおうさま」であることを自慢しながらストーリーが展開する。最後のページで「丸をかいてみよう」と問いかけで終わる。そこで、丸について着目させ、自分の思い浮かべる丸を描くことで表現することができるであろう。「自分だったどんな丸のお話をつくるか」「絵本のまるのお話からどんな遊びにすると楽しいか」など思いを広げ、友達との関わり合いもうまれるであろう。また、絵本『まるまるまるのほん』(エルヴェ・テュレ　さく、谷川俊太郎　文）は、「丸をクリックしてみよう」「絵本を傾けてみよう」など､操作をしながら遊ぶ絵本で「〇」だけが描いてある。丸をもとに遊ぶ視点としては子どもたちのヒントになる。そこで､「まるのおうさま」に続いて紹介することにした。

２）題材「まるのおうさまを描こう」～絵本『まるのおうさま』『まるまるまるのほん』から～　下関市泉幼稚園年長児

①ねらい

・絵本『まるのおうさま』や絵本『まるまるまるの本』を読んだことから､「まる」について感じたことを絵に表すこと楽しむ。

・水彩絵の具やカラーマーカーを使って描くことを楽しむ。

②準備

・四つ切画用紙、共同絵の具（赤、黄、青、緑、白)、カラーマーカー等

③保育の実際

ア.「まる」で遊ぶことへの思いを引き出す導入の工夫

絵本『まるのおうさま』の最後のページは､「まるをかいてみよう」という文とともに毛筆で書いた丸の絵が描いてある。お皿の丸から始まり、コンパス、地球から太陽へ話が進む。本の読み聞かせを聞きながら、子どもはどんな思いを持つであろうか。最後の毛筆での丸から、コンパスで描いた無機的な丸でなく「どんな丸でもよい」というような思いを持たせることができるのではないか。そこで、丸に関しての本、絵本『まるまるまるのほん』を読み聞かせをした。この本は､鉛筆で描いた丸が三つあり「丸をクリックしてみよう」と問いかけ､次のページでは､クリックした丸の色が変わっている｡操作することにより､その結果が次のページに現れる仕掛けになっている。ゲーム機の画面のような手触りや動きはないが、その操作性が面白い。このような遊びを紹介することで丸に対する思いを広げようとした。この読み聞かせの後､「自分の丸の遊びを描いて見よう」と促した。

イ. 絵本の面白さから思いを広げて

ここでは、一人一枚の画用紙でなく、ロール紙を 180cm に切り、6 人位でいっしょに描くことにした。一緒に描くことで、子どもたちは、お互いに自然に関わりあい、遊びを広げることを期待した。

子どもたちは、それぞれに友達と相談することもなく描き始めた。描き進むにつれてお互いの絵を見ながら話し合い、関わりあいながら描き進めている。時には、向かいの場所に行ったり、

席を代わったりしながら描いていた。（図 19）

図 19

④保育の振り返りと考察

絵本『まるのおうさま』では、色々な〇が出てくる。これは、子どもが日常、目にする事ができるもので、まるに視点が当たってストーリーが進む。最後に「まるを　かいて　みよう　すこしくらいでこぼこでもいい・・じぶんのまるを」と投げかけて話が終わる。ここで「〇を描いてみよう。」という投げかけでよいのだが、ここで、もう一冊、絵本「まるまるまるのほん」を紹介し、〇に対する表現の幅を広げることにした。

子どもが描く紙は、四つ切りの画用紙でなくロール紙に 6 人ぐらいで一緒に描くことにした。この環境で子どもは、まず自分の思いで描き始め、ある程度描き終わると一緒のい友達と話を始めお互いに話し合いながら描進める。思いがすぐに浮かぶこと浮かばない子があるが、この環境だと描き始めに時間差があまりない。共同絵の具の色は、赤、青、黄、緑という基本色にしているので、好きな色から描き始めている。

図 20

図 21

子どもたちは、絵の具を使ってやや大きい〇を描き、その〇の中にまた〇を描いたり、綿棒で点を打ったりしていた。（図 20）大きい〇をシャボン玉に見立てたのかその中に生き物を綿棒の点のつながりで描いている。（図 21）そして、空いているスペースに新たに描き加えることを話し合いながら始めている。

図 22

図 23

線で描いた〇を赤色で塗りつぶしていくうちに太陽のような線を描き加えたり、帽子などを描き加えて「雪だるま」にしている。（図 22）大きな〇の中に同心円を描いたり、小さな〇をたくさん描いたりと〇を描くことを楽しんでいる（図 23）

「まるをかこう」と言ったときにどのような遊びをイメージするのか。まるを描くことが遊びになっている。また、ロール紙に描いたので、お互いの表現の様子を見ながらまるを描きながら関わり合い、まるを描く遊びをお互いに同じスペースですることができている。一人で画用紙に向かうより関わりながら遊びが広がる良さがあるのではないかと考える。

(4) 実践事例４　絵本『いろいきてる！』(元永定正・絵　谷川俊太郎・文、福音館書店 2006 年)

１）絵本の解釈と教材化について

この絵本は、抽象画家　元永定正の「流し」の技法による絵によって画面が展開され、谷川の文によるストーリーの展開になっている。「色生きてる」の題名のように、絵の具を流して刻々と姿を変えていくかのような画面になっている。「どこからきたの」という文のように色が加わることで色は変わり、形が変わる面白さを読み取ることができる。絵の具を使った「流し」の技法の面白さを子どもに誘うことができる。そこで、実際に「流し」をやって見せ、色が動き、色や形が変化するのをみせ、ものとものの操作によって偶然にできる形や色、そこから見立てる面白さを味わわせることができるのではないか。

２）保育の実際　題材「絵の具でいろいろ遊ぼう」下関市泉幼稚園年中児

①ねらい

・絵本『いろいきてる！』の絵を読んだり、言葉から感じたことをもとに、自分のお話を絵に表して楽しむ。

・水彩絵の具を流したり、点を打ったりして形や色の変化を楽しむ。

②準備

・四つ切画用紙、共同絵の具（赤、黄、青、緑、白）、カラーマーカー等

③保育の実際

ア．絵本の良さを知らせる導入の工夫

画用紙に水彩絵の具を乗せ、たっぷり筆に水を含ませ、乗せた絵の具の上に置いて画用紙を傾けて流してみせた。画用紙の画面では、絵の具が混じって混色したり形が変わっていっている。「今日は絵の具を流して遊びます。」と伝え、絵本『いろいきてる！』をスライドで大きく映して紹介した。絵の変化を一緒に読み取りながら、文を読み、言葉での話の流れを紹介した。

イ．絵本の面白さから思いを広げて

子どもたちは、紹介して見せたように画用紙の上に絵の具を置き、水を含ませ、絵の具が流れ色や形が変わることを楽しんでいた。その中でＣ児は、画用紙の上に水たまりができるくらい水

を乗せ画用紙の上で混ぜてから流す遊びを始めていた。D 児は、画用紙の乗った絵の具を、筆でかき混ぜ色や形が変わることをたのしんでいた。水と絵の具を使った遊びを自分なりの思いをもって遊ぶ姿が見られた。

図 24

図 25

広いホールでの保育であったが、汚れの面で二クラス同時に実施せずに、一クラスは、実施しているクラスの見学となった。絵本『いろいきてる』の画面の色の流れ方を見ているので見学の子は、絵の具の流れ方と混じり方を見て、流す方向などを話し合っていた。（図 24）また、流し方を変えた表現を見てどうやってやったのかを尋ね、実際に画用紙の動かし方を真似ていた。（図 25）

絵の具を使った遊びが終わった後、乾燥させてから再度「見立て」をしてみた。偶然できた色や形を、画用紙を回してみながら「何に見えるか」を見つける活動をし、見立てたものに見えるようにマーカーやコンテで描き加える活動をした。

④保育の振り返りと考察

これまで絵の具遊びでの墨流しのモダンテクニックは、技法を提示して後は子どもに任せてきたが、絵本から入ることで、子どもは、どう流したらよいかのイメージがあるようだ。導入での流し方の説明はできるだけ簡単にしてきたので、あまりできあがりのイメージを持たずに試行錯誤して絵の具を流していたが、同じ縦にだけ流すにも、流す起点と色を考えて行っている。（図 26）また、絵の具を流すだけでなく、絵の具を含んだ絵の具を振って紙の上に振る技法考えながら使っている。（図 27）縦横に絵の具を流す場所をかえて流しているが各色をうまく配置して流し、混ざり方も綺麗である。（図 28）

図 26

図 27

図 28

(5) 実践事例５　絵本『はいくないきもの』（皆川　明・絵　谷川俊太郎・文、クレヨンハウス 2015 年）

１）絵本の解釈と教材化について

絵本『はいくないきもの』は、絵が先にできていて谷川が文を付けた。皆川は、「ミナ　ペルホ

ネン」という有名ブランドのデザイナーである。この絵をもらった谷川は、「定型的なテキストにしようと思ったら、わりとすらすら書けたんです。五七五の俳句の形にしたわけです。ふつうの俳句ではなくて、五七五の一部だけに意味があってほかは自由な言葉の組み合わせで遊ぶ『はいく』ですけどね。」[8] と述べている。最初のテキストは「おしめしべ　まだのんなりむ　かふっふん」の俳句がつけてあるが、絵を見るとおしべ、めしべのような形に茎が足にも見える。「おしめしべ」と「かふっふん」に意味があるとうかがえる。花のおしべめしべと花粉の関わりが伺える。また、『声に出して読んでこそ楽しいハイク』[9] と言われるように音と言葉から感じとることが可能である。

2）題材　「はいくないきもの」をかこう　　下関市泉幼稚園、周南市愛光幼稚園年長児

①ねらい

・絵本『はいくないきもの』の「ハイク」の音と言葉から感じ取ることを楽しむ。

・自分の描いてみたい「はいくないきもの」を色や形にして楽しむ。

②準備

・画用紙、共同絵の具（赤、青、黄、緑、白）、筆、画板等

③保育の実際

ア．導入の工夫

導入では、絵本『はいくないきもの』をスライドで大きく映しながら読み聞かせを行った。次にもう一度、最初のページから俳句を詠みながら絵の読み取りを子どもと一緒に行った。俳句の文の意味のある部分は意味を押さえ、意味の無い文は読みだけでおいておいた。「どんな生き物がいたら面白いか、絵に描いて教えて。」と問いかけすぐに絵の具による表現に入った。

イ．はいくないきものを描く

ここでの環境は、白画用紙に共同絵の具（赤、黄、青、緑）の周りに風車のように並ぶ座り方である。画面中央にカッパの皿のようなものを描き、その上に虫の触角をつけている。下には目と口、手を左右に青色で描き画面三分の一を青く海にして身体が入っている。画面右に文字「なぞなぞーん」中央「おさんむしむし」左「がばーん　でるでるんー」と書いて矢印で方向づけている。（図 29）

画面中央に亀を描き、頭には噴水を乗せて、青い胴から足が出ている。周りに赤で描いてあるのが何か生き物に見えるが定かではない。（図 30）「もくすりー」と名前をつけた生き物を画面中央左に描いている。足が三本、赤で顔を描いている「くるすうり」と名前をつけた生き物を画面中央右下に三本の足、触覚の頭を描いている。足の描き方が一緒なのでペアで描いたと思われる。右に絵本の表紙にあったような蛾を描き、周りにカブトムシ、クワガタムシを描き加えている。（図 31）

図 29

図 30

図 31

図 32

ウ．良さを振りかえる「見てみてタイム」

絵本『はいくないきもの』の読み聞かせから同じテーマで「はいくないきもの」を描いてきたので、子どもは自分の描いた絵を友達に伝えたいものである。そこで、描いた後、絵の具が乾か

ないのでそのまま、自由に絵を見て回る時間「見てみてタイム」を設けた。自分の絵を自慢したい子は、自分の描いた絵の所に友達を呼び、説明する姿が見られた。(図 32)

④保育の振り返りと考察

「はいくないきもの」は、子どもにとって生き物を描くイメージとして捉えやすい。また、「へんんてこ」等の言い方で自分の知っている生き物とは違うと言うことを文字で説明している。「はいく」については、「575」の文字で表す説明をしたがそれ以上は入らないことにした。図 29、図 31 のように、自分のつくった世界に名前をつけたり音で表したりする子も見られた。「俳句」の音の響きの良さを味わうまで声に出すことをしなかったが、読込むとまた「はいくないきもの」に対する感じ取りがかわってくるだろう。造形表現するにはイメージしやすい題材であるといえる。

5．まとめ

5 領域の一つ「表現」の内容を見ると、造形表現、音楽表現、身体表現と多岐にわたる。これまで、絵画製作、音楽リズム、健康の領域で扱っていた内容を、表現領域とし、子どもはまだ未分化であるので総合的に扱う方向性である。また、保育形態も、子どもの遊びが学びであり、環境を整えて後は子どもに任せる自由保育の方向が歌われているが、こういった中で保育者は子どもにどう関わればよいのか。子どもの興味・関心を見とり、その遊びが継続するように環境を整えるといった保育をするには、保育者の力量か問われる。子ども主体であるとして子どもに任せるのは簡単だが、放任になってしまうことは問題である。文部科学省も教育課程の構築で必ずしも自由保育を提案していない。いつも個別の遊びでなく教材をもって指導するあり方を問うている。子どもの遊びとは何か。子どもが自由に遊んでいる遊びだけを遊びと捉えるものではない。

筆者は、表現の指導法（造形Ⅲ・Ⅳ）で、保育の指導法のあり方を扱っている。指導法の第一の目標は、「子ども主体の保育のあり方」である。保育者は子どもにどう関わり方はどうあればよいのか、子ども主体の保育を考え、自分の保育を振り返ることが保育の質の向上につながる。また、保育にも不易と流行があるが、変わらないところは、保育者として子どもに何を経験して欲しいのか、その適時性はどうかなど、保育者としての願いが保育の中になくてはならないことだと思う。

今年は、教材としての絵本に着目して実践してきた。これまでも、「絵本の中に遊びのタネ」を見つけ教材化してきた。絵本『りんごかもしれない』(よしたけしんすけ　絵・文）は、模擬保育の中で学生が紹介してくれた本である。絵本の中の「このりんごは、・・もしかして」という視点で、リンゴの形の紙の裏に「〇〇」かもしれないと絵を描くように教材化している。これを踏まえ、「見立て」を促すことができるように教材化すると「あっと驚く絵」といった従来からある教材「山折り谷折りを使っただまし絵」に結びつけることができた。

筆者は、創作絵本を自作している。その中で影響を受けたのがイエラ・マリの字のない絵本である。絵を読み取り、絵でお話が展開する表現方式である。谷川が標識絵本に行き着くきっかけになったのもイエラ・マリである。谷川の絵本づくりの面白さは、絵があって、それに文をつける形でつくっていることである。しかも、意味のある文と意味のない文、音で楽しむ事ができるようになって、絵本を味わう上で重要な位置づけになっている。教材としての絵本は、物語絵本であり、お話を聞いて感動したことを描くといった「お話の絵」が主流である。「笠地蔵」「こぶとり」と言った日本の民話からの題材は少なくない。これまで「物語絵本」「認識絵本」の区別を考えず保育をしてきた。この実践をまとめる上で谷川の「認識絵本」の考え方を掴むことができた。認識絵本は、これまでの物語絵本の扱いとは全く別であることがわかった。一昨年、絵本『がちゃがちゃ　どんどん』(元永定正　さく）を年長児クラスで実践した。この絵本は元永が「が

ちゃがちゃ、どんどん」などの音を抽象の絵に表したもので、音を絵にすることが子どもにはイメージとしてつかめないようであった。表現活動の中で子どもに聞き取りをすると「生活体験の中で聞く音」に結びつける例えば「箱がパッカと開く」の「パッカッ」となら描けそうだとわかった。谷川の絵本『もこ　もこもこ』を使って保育した時、身体表現が可能であり、言葉での読み取りができたので子ども達も表現しやすそうだった。この二つの実践を比較した時、谷川の文の面白さの重要さがわかり、今年の実践につながった。

保育者として、教材をどう見て、どのように加工していけばよいのか、あるものを「つくる・描く」のが目的でなく、「見立て」ができるように教材を加工し、創造的な想像力が働く場ができるように考える力が必要である。

〈引用文献〉

1）山野てるひ　岡林典子　水戸部修治　編「絵本から広がる表現教育のアイデア」p9　一藝社　東京（2018）
2）谷川俊太郎　「絵本★百貨典」p53　ブルーシープ　東京（2023）
3）谷川俊太郎　「絵本★百貨典」p26　ブルーシープ　東京（2023）
4）谷川俊太郎　「絵本★百貨典」p298　ブルーシープ　東京（2023）
5）谷川俊太郎　「絵本★百貨典」p94　ブルーシープ　東京（2023）
6）谷川俊太郎　「絵本★百貨典」p36　ブルーシープ　東京（2023）
7）山野てるひ　岡林典子　水戸部修治　編「絵本から広がる表現教育のアイデア」p32　一藝社　東京（2018）
8）谷川俊太郎　「絵本★百貨典」p329　ブルーシープ　東京（2023）
9）谷川俊太郎　「絵本★百貨典」p329　ブルーシープ　東京（2023）